
一生食べさせてあげますよ

芝山 玲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一生食べさせてあげますよ

【Nコード】

N9251Y

【作者名】

芝山 玲

【あらすじ】

企画競作 お題「辺境」

ある日父が連れて帰ってきた娘は、異世界からやってきた、と言った。

特に何ができるわけでもない娘は我が家の居候となったのだが。

(前書き)

企画競作 お題「境界」

おまえただ「境界」って言いたいだけちゃうんか、という話。

「やっと見つけた！」

大股で草の生えた土手を駆け下りる。

周囲の住民と談笑しながら、木でできた椀とさじを手にしていた彼女は一瞬、ヤバイ、という顔をしたがこちらと椀の中身を見比べた後、ため息をついて逃げるのを諦めた表情になった。椀を持って走るには中身が多すぎたか、まだ食べたりずお代わりをするためにこの場を離れるわけにはいかないと考えたかのどちらかであろうことが明白で、頭が痛くなる。

「そこを動いてはなりませんよ、スウ！」

「怒られるようなことしてないのに」

スウは泣きそうな顔でわたしに訴えた。そして手にしたさじで椀の中身を口に運び、おいし、と頬を緩ませた。

スウは道楽好きの父が拾ってきた娘である。

ある日突然大きな子供を連れて帰ってきたため我が家の両親はちよつとした危機に陥った。浮気をしたのか、裏切ったのか、と泣いて父を詰った母が不承不承矛を収めたのは、父があまりにもあつけらかんとしていたのと、娘の意味不明な訴えがあつたためである。

娘はハシモト・スズコと名乗った。

「スウジユオ？」

「うつわ。そんな呼ばれ方したこと無いわ。鈴子って発音できないんですね？　じゃあスウって呼んでください。すずおじゃ男名前だ」
物怖じをしない子だと思った。

着ている服は見慣れない形をしており丈も短かったから間違つてもどこかのご令嬢という線は無いと判断したが縫製は丁寧で高級品

と思われる。

長く伸ばした髪は黒くつやつやとしており、手間をかけて手入れをしていることが窺えるしスウの手は白く小さく柔らかい。手を動かして働いたことのないほっそりとした指先だ。しかも伸ばされた爪には唇の色と比べるとやや淡いピンクの色まで塗られている。

我が国には無い風習だが、こうした贅沢を許されている階級の娘であろうとは見て取れた。

「日本という国に住んでました」

「ニホン？ それはどこの」

スウは首をすくめた。

「多分、私の想像が当たっていれば、この世界には無い国です」

スウが語ったのはにわかには信じがたい、というより時間をかけたからといって信じることができるとはとうてい言えない、荒唐無稽な話だった。

スウはジテンシヤなる乗り物にて学校から自宅へと戻るさいちゅう、側溝に落ちたのだと言う。雪が積もっていて滑った、とスウは恥ずかしそうに笑ったのだが、学校に通わせてもらえる家格の、通うことを許される頭脳のご令嬢が、なぜ一人で学校と自宅を往復していたのかと疑念を差し挟むと、そんなのふつうだよ、と返された。話せば長くなる、と言いながらスウは、自分の国では子供に対して九年間の義務教育が保証されていて望む者はさらにその先三年プラス数年、多くは四年の教育を受けてから社会に出るのだと説明した。スウはすでに義務教育は終わっており、その先の教育機関であるコウコウというものに通っていたのだそうだ。着ている服はその制服であると言う。

「理由はまったくわからないけど、私は異世界トリップというものをしたんだと思います」

「イセカイトリップ？」

耳慣れない単語を問い返すとスウは幼い仕草でこくりと頷いた。

「それは、スウの国というか世界ではよくあることなのか？」

「よくあつたら困ります。っていうか物語の世界にしか無いですよ。そもそも異世界なんてどこにあるんだ、って話ですよ。人間はまだ隣の惑星にさえ行けないんですよ。行こうって計画があるだけで。ほんとにこの国って魔法とか無いんですよ？ 魔物が出ていて困つてるとか魔王を倒すために勇者が必要とかってことも無いんですよね？」

「無い」

それこそ物語の話だ。魔法や魔王など絵本でしか見たことがないが。

道中父にもさんざん確認をしていたらしいスウはわたしが言下に否定したことで緊張を緩ませ、やっと目の前にあるカップを手にした。

母が手ずから入れた茶だったのだが、スウは口にした瞬間目を見開いた。

「これは……何のお茶ですか？」

「最近はやっている花茶よ。花びらを天日に干した物でとても良い香りと優しい味がするの」

「やさ……しい？」

スウは眉間にしわを寄せ、親の敵のような目で茶を睨み、カップをソーサーに戻した。そして話が終わるまで一度も手を付けなかった。

庶民でさえも常識的に知っている事をスウは全く知らなかった。会話ができるのに文字は全く読み書きができなかった。だが高等教育を受けていたのは嘘ではなかったようで、受け答えは筋道も通っているし、父が四苦八苦している所領の帳簿の精査も、数字を読み上げてくれれば、と言って八桁の数字を苦もなく暗算して見せた。親にソロバンやらされてたんで、とはにかんだ笑顔は可愛らしかった。

たがこちらが驚いたのは事実だ。

スウの出自に半信半疑であつた母もわたしも館の者も、これではスウを別の世界二ホンからやってきた娘だと認めないわけにはいかなかった。

母はころりと態度を変えた。

出産は一度でこりこりだったのだそうだが、娘がほしくてたまらなかつたのだそうだ。

ドレスを誂えに行こう、アクセサリーを買いに行こう、芝居を見に行こう、となくくれとなくスウを連れ出そうとする母は楽しそうだった。父は母と一緒に出かけられるスウを羨ましがり、不自由をしなくて済むようにとスウのための支出を計上し、我が家の客人だ娘と同等の扱いだ、と言った。

わたしは 態度を決めかねていた。

聞けばスウは十七歳だという。八つも年下ではないか。年の離れた兄弟姉妹は珍しくはない。とくに我々のような家格であれば当主が正妻ではなく余所で子をもつけることも認められている。そうした場合は母親の年齢に左右されてか、親子ほども年齢の違う異母兄弟ができあがってしまうこともある。

そうした子はまだ幼い内に引き取られる。血筋を自覚することと家風に馴染ませることが目的だ。

だがスウは父の胤ではない。そして子供でもない。

我が家の家風に馴染ませる必要も無ければ、我が家の子と認識させる必要も無い。

母が我が娘のようにスウを甘やかすたびに、父が目に入れても痛くないとスウをかわいがる様子に、わたしだけはスウを認めてはいけないような気にさせられた。

スウはひどく小食だった。

食事のときにはひどくつらそうな顔をしてテーブルに着いていた。優雅にはほど遠いゆっくりとした動作で口にするその表情は決死と言うにふさわしい。

そして口を閉じた瞬間、眉間にしわを寄せたり、ぎゅっと目を瞑ったり、口元に力を入れたりしている。

「スウ、口の中が痛いのかい？」

父の問いにスウは、いいえ、と答えた。

「口の中ではないのじゃなくて？ 頭とかお腹とか」

心配をそのまま顔に出す母に、スウは笑顔を向ける。

「どこも痛くないです。大丈夫です」

だがそれきりスウはテーブルの上の物に手を付けない。料理人があれこれと苦心をし、女性ならば甘いものが好きだろう、もしや子供の好むようなものが好きかも、と用意したあれこれを、どうにか一口食べる。残して本当にごめんなさい、と涙ぐむ。

単に小食だと思っていただけの間違いだと気付いたのはある夜、スウの部屋の前を通りがかったときに聞こえた泣き声のせいだ。

「お腹空いたよう……」

ノックをすると泣き声がぴたりとやんだ。ずるり、と鼻を吸る音がしたのは気のせいだと思いたい。

「どなたでしょう」

「わたしだ」

しばらくの間があつてドアが開いた。スウの目と鼻の頭は真っ赤になっていた。

「何か」

「腹が減っているのならどうしてもっと食べないのだ」

「食べたいですよ！ 私だって！ 食べられないんですよ！」

急に怒り出したスウに面食らう。

「それはあれか。コルセットが」

貴婦人たちは競うようにウエストをコルセットで絞り上げる。晩餐会では小鳥の餌よりもまだ少ない量を食べるに留め、ふらふらと

していらいっしやる。何事があるたびに、あ、と一声漏らして失神するのは貴婦人方が繊細なのではなくコルセットの締め付けのせいだ、とは周知の事実なのだがご婦人方はウエストを細くするのに余念がないし、男もそれを止めない。悪循環だ。

スウのいた国にはコルセットなどは無かったのだそうだ。

それが原因で食事がろくにできないのであればやめてしまえ、と思う。コルセットを着用しない、というのは論外だが食事が喉を通るように緩めるくらいはしてもいいのではないか。

「違う」

だがスウはコルセットのせいではない、と言った。

コルセットに不慣れなスウのために母は骨の柔らかい子供用を準備してやったらしく、侍女もスウが苦しがるので締め上げるようなことはしていないらしい。

「あの。こんなことを言うとは本当に失礼なんだけど」

スウはそう前置きして言った。

食事が不味い、と。

「語弊があるね。あの、私が食べ慣れていた物と味や食感がかけ離れていて、受け付けない物が多いの。料理をしてくれる人が毎回腕によりをかけてくれていることはわかってる。このおうちもとても立派でお金持ちだっていうのはわかるから、きつと出てくる食事も毎回超高級なんだろうって思う。奥様に連れていってもらったお店で出てきた料理もここで出てくると同じだった。だからね、あの、ここではふつつの、というか高級な料理が私には食べられないものなの」

「だが　ここに来てもう半年近く経つだろう。どうやって」

スウの言うことが本当ならば、半年近くもスウはろくに食べない生活を強いられていたことになる。やせ細るなり栄養が足りなくなつて病気になるなりするであろうに、スウはあまり変わらないように見える。それはなぜだ。

「あの……。怒らない？」

「怒るようなことをしていたのか？」

「もしかしたら。庭になつてる果物とか、奥様が飼つてらっしゃるシェリーのエサを横取りしてた」

「どうりで母上が、最近シェリーが食べ過ぎる割に痩せていておかしい、と心配されるわけだ」

シェリーというのは母のペットだ。両翼を広げると大人の背丈ほどもある鳥で、本来は野生なのだが母のたつての望みだから、と父が買い与えてしまった。おかげで我が家自慢であつた温室はシェリーの住居となつて久しい。夜行性であるため昼間に見に行つても枝に留まつて寝ているばかりだ。

「だがあいつのエサは」

生肉のはずなのだが。

「あの、調理室から捌いたお肉をすぐ持つてきてるでしょう？ 昼間ならシェリーはおとなしいからちよつとだけもらつて、家の裏で焼いて食べる」

「焼いて!？」

「焼かないと食べられないよ」

「いや、味は」

「塩があればなんとか。本当はコシヨウとかシヨウユとか恋しいけど、こつちには無いんだよね」

「コシヨウやシヨウユというのは聞いたことが無いな。似たような名前なら聞いたことがあるが」

「うん。まあそんなわけだね。シェリーのご飯を全部取っちゃうとまずいでしょ。うっかりしたらそのうち鳥かごに入つていった私をシェリーが狙うようになるかも知れない」

「いや。あれは鳥かごではないのだが」

結果として大きな鳥かごになつてしまつただけで温室なのだが。

だが確かにスウの言うように、エサを横取りする敵だ、とシェリーが認識してしまいスウを襲うのは良くない。

「だから焼いただけのお肉とか切つただけの果物とかがいいんだけ

ど」

「焼いただけの肉ならまだしも、庭のあれは果物ではない」

「え！？」

「同じ形はしているがあれは観賞用だ。果物がいいのならちゃんとしたもの」

「じゃあだめだ！」

スウは叫んで頭を抱えた。

「ふつうの果物は奥様にいろいろ食べさせてもらった。お菓子の上にのってるのも試した。全部だめだった。庭にあったあれだけが食べられたの」

「おまえ……人の食べ物だめなのか」

「こっちの人が食べる物が、ね」

もっと早く言えばいいのに、と両親は苦笑混じりに言い、スウの食事は焼いただけの肉と、品種改良により観賞用となった木の実がメインになった。

どうにか腹一杯食べることはできるようになったようだが、それで栄養が足りるわけでは無い。スウは常にぎらぎらとした目で食べられる物を探すようになっていた。

そしてスウは出会ってしまった。

年に一度の収穫祭は身分の差無く、帝都のみならず周辺の地域までもが一年の実りに感謝し喜びに包まれる期間だ。

我が家の所領からも珍しい特産品が運び込まれる。この機に新たな販路が拓かれるかも知れないためどこの家も力の入れ方が違う。広場は家格に合わせて区画が割り当てられ店を出すことができる。

周辺の店もこれに便乗する。

父は当然のごとく母をエスコートしまずは王宮へ向かう。わたしにも拝謁の栄誉が与えられているため両親と同行したが、乗ってきた馬車はスウを迎えにやるために返した。両親は両親で行動するだろう。わたしはスウを広場へ連れて行ってやるう、と思ったのだ。

いまは広場にこの大陸上にある全ての食べ物が集まってきていると言っても過言ではない。帝都の人間が見たこともない食物も、帝都の物ならば眉を顰めるような聞いたことのない調理方法も、溢れているに違いない。そしてもしかしたらその中に、スウの気に入る物があるかも知れない。そう考えたのだ。

馬車に乗ってやってきたスウは滅多に着ない外出用のドレスを着せられていた。家の者が、礼装で出かけたわたしに合わせてスウを着飾らせたものだろう。

落ち着かない様子のスウはわたしの出した腕も無視し、一人で歩いていくとする。

目立つように儀礼服を着た騎士たちが広場や帝都のあちこちに立っており、目立たぬ行動服を着た騎士もまた人混みの仲に紛れ込んで治安を維持しているが、この人出は安全とは言い難い。

わたしはスウを捕まえ、身分のある女性は一人歩きなどしないものだ、と言いつつ聞かせわたしの腕に手を絡ませるよう言いつけた。

帝都にもともとある店にはスウは興味を惹かれなかったようだ。

だが広場にやってくると、おや、と首を傾げるような仕草をした。「あつちからいいにおいがする」

そして広場の中心部から遠ざかる。

先にも述べたとおり広場は家格によりその区画が割り当てられている。すなわち中心部に近く広い場所を有している家ほどその格が高い。逆に離れて行けば行くほど、所領も辺境にわずかしか持たないような下級貴族や、その貴族の籍を金で買った裕福な商人の家と言えるのだ。

「スウ」

わたしが止めるのも聞かずスウはどんどん広場の端へと歩いていき、薄汚れたテントの前に立った。

「これはなんですか？」

「私どもの地域の郷土料理なんですよ。どうぞ味見してください」
頭に布を被った、丸まると太った農婦のような女性が木でできた
椀を差し出してくる。こうした場でよく使われる簡易用の食器だ。
水や油が染みこみにくく、落としても割れないため、すぐに洗って
何度でも使える。

スウは受け取るとためらいもなく口に運んだ。

「スウ！？」

我が家での食事はあれほど警戒し、おそろおそろ口を開けていた
というのに。

そして次の瞬間口から出た言葉にわたしは度肝を抜かれる。

「おいしい！ これ、なんていう料理ですか」

「名前なんて無いですよ」

農婦はころりと笑った。

「使っているのはあたしらの地域の特産でギユズキという野菜です。
それと肉を煮込んだだけで」

「野菜！ どれですか！」

スウは勢い込んで調理をしているあたりを見回す。農婦は、これ
ですよ、と両手ほどもある茶色く丸い固まりを持ってきた。茶色い
苔のくつついた岩のようだ。

「サトイモみたい。でかすぎるけど」

スウは分からないことを言いつつそれを受け取った。

「これ、買える？」

振り返って発した言葉に、それがわたしへの問いだったことに気
づく。

「あ、ああ。これは売り物だろうか？」

「できれば商談をしたいところなんですけどねえ」

わたしの身ごしらえのせいであろう。農婦は少し狡そうな口調で

言ったが、残念そうに首を振った。

「こちらのお嬢さんにお売りますよ。一つでいいですか？」

「……一つしか持って行けなさそう」

大きさと重さにスウは悲しげな声で答えた。

金を払い、ギユズキはわたしが持つてやることにして、また広場を移動する。

スウは決して広場の中心部へは行かなかった。立ち寄るのは辺遠から出てきて出店をしているところばかりで、そこで出会う食べ物にはいちいちおいしいと声を上げた。ニッポンで食べていた物に似ているのだと言う。ある場所ではその場で泣き出してしまった。お母さんの味と一緒に、と言って。

わたしにとっては得体の知れない、だがスウにとっては宝物のような珍しい食品を馬車に満載し、我々は帰宅の途についた。

祭りは一ヶ月ほど続くのだ、と教えてやるとスウは手を叩いて喜び、翌日からはわたしや手の空いた侍女果てはむりやり料理人まで連れ出して広場を回ったらしい。

そして。

スウは出て行った。

正確には、行動範囲がとてつもなく広く、また長くなってしまった。

自分が食べられる物は帝都には無い、と知ってしまったスウは辺境の地へ行くことを望んだのだ。

我が家の所領は残念ながら帝都内およびその周囲であり、とても辺境とは言い難い。故にそこで採れる農産物にしても帝都に日常的に入ってくるそれと変わりなく、スウの口には合わない。父や母がいくら泣いて頼んだところで所領にある別荘ごときではスウの口は満足しないのだ。

スウは知ってしまったのだ。

自分がおいしいと感じられる食事を日常的に食べている地域があることを。

辺境など一日や二日で往復できる距離では無い。

美味しい物が食べられるのだから、滞在を数日で切り上げるはずがない。

なまじ我が家に財産や自由になる人間がいたのもまずかった。

スウは辺境を食べ歩く放蕩娘となってしまった。

本気で我が家の娘にするつもりだったらしい母は泣き暮らすし、父もなにやら元気が無い。帳簿精査の時期などは寝言でもスウを呼ぶ。

仕方なくわたしがスウを迎えに行くのだ。

スウは我が家の馬車を使い、むりやりに母が付けた使用人二人と御者と小姓の五人で旅の空に暮らしている。使用人に、居場所の報告義務を言い渡してあるのでいくら辺境といえだいたいどのあたりにいるのかはわかる。だが迎えに行くのに馬で二十日というのもザラなのだ。ようようたどり着いてみれば移動した後だったりもする。

本日やはり父の命でスウを迎えに来たわたしが、伝え聞いていた辺境まで要した日数二十六日、その後周辺地域を探して三日でスウを見つけることができたのは僥倖である。

「スウ！ どうしてあなたはひとところにいられないんですか」

「いるよ。今の宿はもう三ヶ月以上いるよね？」

スウは横に控えている使用人に確認を取る。

「そういうことを言っているんじゃないやありません。あなたは宿を基点にふらふらと動きすぎです。今日ここであなたを見つけることができますがどれだけ安心したか分かりますか」

「もう。クルトうるさい」

「う、うるさい！？ あなたの身を案じて言っているのに」

「それは」

スウは空になった碗を使用人に渡して立ち上がると、スカートの尻のあたりを叩いた。どうやら直接岩の上に座っていたらしい。呆れて使用人を睨むと、自分の落ち度ではないと言わんばかりに首を振る。どうやら簡易いすや布の用意も調わぬうちにスウが走って行ってしまったのだらう。いつものことだが。

「ありがたいと思っています。ご当主様にも奥様にも、どの誰ともわからない私が好きにすることを許してくださってるのを感謝しています。おかげで私は不自由なくご飯が食べられるようになった」

「そこですか」

「そこです！」

スウは体の横で両の拳をぐっと握った。

「食えることは生きることです。私はこの世界で生きていくんだ！」
「その決意はご立派ですがね、生きることが食べることのみでできているわけではないでしょう。一度帰っていただきますよ」

スウの体はへにやりとその場に崩れた。しゃがみ込んだらしい。

「ですよー。クルトが迎えに来たんじゃしょうがない」

お邪魔しました、お世話になりました、と周囲に挨拶をし片付けを始める。会話を聞くにどうやらスウは、この十四、五人の団体の昼食に乱入したらしい。

美味しい物を食べるためとはいえこの行動力には恐れ入る。

「また帳簿の前で唸ってらっしゃるんですか？」

「それもあります」

そんなに短期間にソロバンが上達したりはしないか、と言ってスウは、ははは、と笑った。スウの計算能力を高く買った父はスウを手元に置きたがった。反してスウは辺境へ行きたがった。スウはソロバンなる道具を作り、父に使い方を教えたのだ。労働を知らぬ階級のしなやかな手ではあるがやはりそこは父も男である。指も太いし、楽器をたしなむ女性のように繊細に動かせるわけでもない。ソロバンの玉をうまく弾けずに苦勞し、やはりスウがいなくては、と泣きついたのだが、スウは、練習すれば上達しますよ、ソロバンが

できるなんて帝都でご当主様一人じゃないですか、かつこいい、とアメとムチならぬアメ漬けにして、帝都に引き止めようとする父を振り切ったのだ。

スウは少し思案顔になり、また聞いてくる。

「じゃあ奥様かな。新しいドレスを作りたいって言ってるのか？」

「それもあります」

スウの傍へ駆け寄る前に御者と小姓には宿を引き払い馬車をこちらに差し向けるように言いつけておいた。押っ付けやってくるだろう。

スウの手を取り、先ほどは駆け下りた土手を上る。

「あれはいつたいたんだったんです？」

「あれ？」

「あなたが先ほど食べていたものです」

「ああ。なんて言ったっけ。カーシャルっていう生き物の肉とシュマっていう野菜を交互に重ねて蒸したんだって。日本で食べてたハクサイとブタニクの重ね蒸しに似てて美味しかったんだ」

ハクサイもブタニクもわたしにはわからないが、カーシャルというのは以前に図鑑で見たことがある。幼生の頃は水の中に住み成長して四本足が生え陸に上がってくる、ゲコゲコと耳障りな声で鳴く生き物だ。あれは 食べられるものなのか。

「帝都に新しい芝居でもかかっている？」

「なぜです？」

「いや、奥様が私を連れて見に行くって言ったのかな、って」

「違いますよ」

「じゃあなんで私、呼び戻されるの。ついこの間帰ったばかりだと思ってたのに」

「五ヶ月をついこの間とは言いませんよ。それにあなたを呼び戻す理由がどうして父や母にしか無いと思うんですか」

「へ？ じゃあなんで？」

「そろそろ帝都では収穫祭の準備が始まりますよ」

スウは手を叩いて喜んだ。

「じゃあ一ヶ月は帝都にいながらにして辺境の料理が食べられるね！」

自分では全く料理をしなくせに何を言っているのだろう、この娘は。

だが蕩けそうな顔で喜んでいるのを見るとそれもどうでもよくなくなる。

「収穫祭の時にはわたしも両親について拝謁に伺うのですが」

「はい？」

「その際に結婚のお許しをいただいてくる予定です」

「あー」

スウは抑揚のない声を出した。

「あれですか。貴族は王様の許しをもらわないと結婚できないとかそういう」

「王様、ではないですがね。スウの国にもありましたか？」

「私の国はどうだろう。むかーしはあった……かな。あと違う国にはあるのかも。よく知らないけど」

「そうですか。まあそういうわけでね、結婚をするのです」

「そりやおめでとう。じゃあ妹分としては精一杯お祝いをしないとね。お式はいつなの？」

やってきた馬車には使用人たちを乗せ、スウはわたしが乗ってきた馬車へと乗せた。

「ともかくあなたに帝都にいていただかないことには式もできません」

「はあ……？」

「スウ」

「はい」

「これからも辺境で好きに食事をしたいと望みますか？」

「そりやもちろん」

スウは間髪を入れず答えてきた。

「いままでのように？」

「できれば」

「我が家の保護を受けながら？」

「う……。図々しいとは思いますがかなうなら」

「結構。ではしばらくの間我慢してくださいね。収穫祭の間に保存できそうな食料はできるだけ買ってあげます。取引が可能な相手なら定期的に仕入れを考えてもいい」

「あの、クルト？」

「なんです？」

「私が、帝都にいる間にお式をする、ってことなのかな？」

「そうですね、もちろん」

「いや、私はいいんじゃないの？ いなくても。ご当主様にも奥様にもよくしていただいてるし、クルトの妹分だとは言ってるけど、実際には超好待遇の客つてところだろうし、客はお式に招待は」

「何を言ってるんですか、あなたは。花嫁がいなくてどうやって式をやるんです」

スウは。

馬車の屋根が飛ぶんじゃないか、と思うような悲鳴を上げた。

「なんで？　なんで私？　いや、クルト？」

「あなた、先ほど言ったじゃないですか。いままでの生活をした、と。我が家の保護を受けるならこれほど確実なことはないでしょう」

「いやっ、でもね！　それで結婚ってクルトには何の利益も」

「ありますよ、利益。なにしろあなたは計算だけは速く正確だし」

泣きそうな顔でわたしから離れて馬車の隅に寄っていたスウはそこで頬を膨らませた。

「それだけです。私のいいところ」

「まあ、装飾品などをねだらないあたり金ばかりませんが、別の

意味で金がかかりますからねえ」

「……すみません」

辺境の地を食べ歩いているのがどういふことかはわかっているように、スウはしゅんとなってしまった。

「ですからね」

手を伸ばし、俯いてしまった顔を上げさせる。

「客人に対しての待遇を超えてしまっているのです。ですが父も母もあなたの望むことをしてやりたいと願っている。それこそ我が娘に對するようにね。だったら娘になるのが早いじゃありませんか」

「それだけだったら……」

なにも結婚なんかしなくても、と震える小さな声が言う。

「クルトはそれでいいの？」

「それでいいものにも」

頬に触れている手を頭の上へと移動させる。それだけでスウはほっとしたように力を抜いた。

「あなたが辺境で過ごす資金を出しているのは父ではなくわたしです」

途端にまたスウの体が音を立てて固まる。

「言ってなかったから知らなかったでしょうけど、わたしです。食べることは生きることだ、とあなたは言った。わたしはあなたにこの世界で生きてほしい。だからあなたを食べさせる。どこも間違っていないでしょう？」

「でも結婚は」

「船で大河を渡った先にはどんな食べ物があるでしょうねえ。行ってみたいと思いませんか？」

スウは目を輝かせ、ぱつとこちらへ顔を向けた。

「川の向こう？」

「また気候も全く違いますから、違う植物や動物がいるのでしょうか。行ってみたいと思いませんか？」

「行きた」

「新婚旅行で」

行きたい、と言いかけたスウはわたしの言葉にまた慌てて馬車の隅へと逃げてしまった。

我が国では正妻の他に妻を持つことなどなんら珍しくはないのだ。スウがどうしてもわたしとの結婚が嫌だと言うのなら、名目上正妻の座に収まってもらい子をもうけるのは別の女性との間であつてもかまわない。

父の跡を継ぎ、後継となる息子は家に留め置いて、一年の半分を奥方の望むままに所領をめぐって帝都では考えられないゲテモノを食べて歩く徘徊伯、とわたしがあだ名されるようになるのはそれから二十年後のことである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9251y/>

一生食べさせてあげますよ

2011年11月27日18時48分発行